


●ガバナー 今井 高志 ● 会長 西村 幸也 ● 幹事 西尾 和樹 ● コミュニケーション委員長 熊谷 道雄

ホームページ：http://www.hi-net.ne.jp/~hsrclub/ Email：hsrclub-2830@cd.hi-net.ne.jp

Facebook ページ：https://www.facebook.com/hachinoheminamirc/

 Facebook ページに「いいね！👍」をお願いします。

RI 第 2830 地区ホームページ：http://www.rotary-aomori.org/2016/

第 2091 回 例会 記録

《会員卓話例会》

2019 年 1 月 24 日 (木)

点鐘 12：30

レポート No. 1523

四つのテスト

言行はこれに照らしてから

- 1) 真実か どうか
- 2) みんなに公平か
- 3) 好意と友情を深めるか
- 4) みんなのためになるか どうか



《会長要件》西村会長



皆さん、こんにちは。一年で一番寒い季節になってきました。インフルエンザも猛威をふるい始めているようですので、皆さん罹らないようにお気をつけ下さい。

今日は三川先生に会員卓話をお願いしていますので、その邪魔にならないように、会長要件は短めにお話ししたいと思います。今月が職業奉仕月間であることにちなんで、少しだけそのお話しをしてみます。とは言っても、「職業奉仕」については私よりもはるかに熟知している先輩会員の皆さんを前にして、何か目新しいことをお話しできるわけではありません。

私自身、入会当時は「職業奉仕」の意味がよく分かりませんでした。職業奉仕について、前回熊谷委員長が紹介してくださいました『ロータリーの友 1 月号』の特集記事の筆頭に、2700 地区のバスターガバナーである福岡県の廣畑富雄さんが分かりやすい記事を寄せています。標題は、「職業奉仕 Vocational Service とは何か」です。私はこの記事に興味をもって、この文章の出典になっている、廣畑さんの著書『ロータリーの心と原点』を取り寄せて読んでみました。内容を私なりに要約すると、そもそもの間違いは Vocational Service を「職業奉仕」と和訳したことにある。Service は奉仕ではなくもっと広い内容を持っていて「人のためになる、さまざまなこと」を意味しているので、無理に和訳しないでそのままサービスという言葉を使うほうがずっと判りやすい。例えば奥様にサービスすることが「奥様奉仕」ではおかしいでしょうと例を引いています。

次に強調されているのが、どんな職業にも貴賤はなく、おのおのの職業に誠心誠意務めるのが職業奉仕の本質であると繰り返し述べています。それが自分のためだけでなく周囲の方々のためになっているかどうかは、4つのテストを日々かみしめてほしい、これを単なる念仏のように唱えるだけではもったいない、とも述べておられました。

少し長くなってしまったので、本日の会長要件は

《出席報告》原委員長



正会員数 36 名。本日の出席は免除会員 3 名を含む 24 名。出席率は 73% です。前々回の例会は、新年互礼例会でした。

ここまでと致したいと思います。続きはいずれかの機会に。

《バッジ伝達》



MPF 1 回目 赤穂会員

《結婚記念日》



下田会員

《幹事報告》西尾会員

・来週の例会はロータリー理解推進及びポールハリス追悼例会で 18 時 30 分からです。

・来月 2 月 23 日 (土) は南グループ IM です。ホストクラブですのでご協力をお願いします。

・青森モーニング RC より創立 30 周年記念式典祝賀会の案内が来ており出欠を回しています。

・例会変更のお知らせ、八戸東 RC2 月 8 日 (金) 例会変更、八戸北 RC2 月 26 日 (火) 時間変更、八戸中央 RC2 月 11 日 (月) 祝日につき休会、2 月 25 日 (月) 時間変更、八戸西 RC2 月 28 日 (木) 休会、3 月 14 日 (木) 時間変更、3 月 21 日 (木) 祝日につき休会。



《ニコニコボックス》本多委員

西村会長：三川先生のお話に期待しています。

西尾幹事：三川副会長、本日の卓話よろしくお願ひ致します。

三川会員：本日卓話させていただきます。よろしくお願ひします。

米内会員：今年もよろしくおねがいたします。

伊藤会員：三川副会長、今日の卓話楽しみに来ました。

吉田賢治会員：三川副会長、楽しみにしています。

本人誕生日：三川会員

結婚記念日：下田会員



《会員卓話》三川会員



皆さんこんにちは、久しぶりに卓話をする事になりました、よろしくお願ひします。誕生日の一言もということですが、ちょうど70になりましたてこんな年になったのかと思います。

なんとなく70になると大体自分の人生を総括するとか、自分の人生は何だったんだろうとまとめた気もないわけではないんですが、皆さんもおそらく私より先輩の方々はそのような思いを持ったりもしているかと思ひます。

時々私は講演を頼まれてやらせていただひていますが、ちょうど去年の11月10日、ここにパンフレットがありますが十和田湖で短歌大会がありまして、その時に何か講演をとたのまれまして、十和田といえばやっぱり大町桂月なので、ちょっと大町桂月の話をしようかと勉強しました。その時の資料を基に、短歌大会の時の講演とは同じではありませんが皆さんにその一端をご紹介したいと、今日のテーマは「大町桂月の実像、その光と影」といたしました。

十和田観光に行きますと大町桂月がああ言った、こう言ったとガイドさんが話をしてくれます。観光船に乗っても観光バスに乗ってもしてくれますが、大町桂月は本当は何をした人かというのはなかなか知られておりません。晩年蕨温泉をこよなく愛して、蕨温泉で亡くなっていますけれども、この人は文壇ではどういう活躍をした人なのかということとはなかなか知られていないし、知る術がないというか知る機会がありません。というのは本があまり出ていないからで大町桂月の本は本屋に行ってもありません。ですから大町桂月、大町桂月と騒ぐ割には何この人、ただの酒飲みじゃないか、酒飲んで俳句とか短歌とか作ってウロウロしている遊び人じゃないかという印象しかありませんが、その割に大町桂月、大町桂月と騒がれているわけで、私はその辺を皆さんにちゃんとお知らせして大町桂月を正當に評価してもらわなければならないという思いもあってこういうテーマで短歌大会の講演をし、本日またその内容の主な部分を皆さんに紹介いたします。

大町桂月は酒仙鉄脚の文人と言われております。酒仙というのは誉め言葉であり要するに酒飲みだということです。鉄脚というのはそのまま、この人は非常に健脚な方で、旅行を愛して、しかも徒歩で

いろんなところに行って登山もして歩くことには非常に自信のあった人です。全国各地歩き回った、彼の文業の後半は各地を歩き回った紀行文で、それが皆さんに評判で各地を歩いた紀行文を書いています。いろんな所に行っていますが特に北海道の大雪山付近の踏破は有名です。その山や景勝地に名前を付けました。例えば桂月岳というのは大雪山系の小さな山で名前がついていなかったのが桂月岳と名前を付けたということです。また層雲峡というのは皆さんご存知のように旭川近辺のとても美しいところです。県内では十和田湖、奥入瀬、仏ヶ浦、県内各地を沢山歩き名前のついていないところには名前を付けたし、俳句や短歌を作り歌碑とか文学碑で沢山残っています。ガイドさんがよく紹介する「住まば日本遊ばば十和田 歩きや奥入瀬 三里半」ですが、これは本当は都都逸です、短歌でも俳句でもありません。七・七・七・五です。皆さん聞いたことあるでしょう。ガイドさんが必ず紹介します。これはあまり有名ではありませんが十和田の景色が素晴らしいと紹介した俳句の「山は富士 湖水は十和田 ひろい世界に ひとつずつ」は富士山と十和田は匹敵するほど素晴らしい景色だと言ひています。こちらは県内の酒蔵を見学したときに詠んだ歌で、ひところテレビの commercials に引用されたので知っている人も多いと思ひます。「身を代えて 樽に並ばや蔵の中 一百石の酒を湛へむ」酒好きですから自分が酒の樽になりたいと詠んだ短歌です、いかにも酒飲みらしい短歌です。これは蕨温泉に泊ると箸の袋の中に書いてあります「ばんどりを ばんかたとりて ばんしゃくの こんばんうれし よくばんもかな」ばんどりというのはムササビのことで昔は食べていました。ばんどりを夕方捕ってそれを酒の肴にして飲む、今晚はうれしいな、明日の晩もそうしたいもんだなあという短歌です。恐山に行くと恐山の暖簾に書いて売っています「恐山 心と見ゆる湖をかこめる峰も 蓮華なりけり」そんな難しい歌ではありません。このように各地の景色を詠んだり自分の思いを詠んだりして、県内では非常に知られているわけです。この人は高知の出身なんですが、高知を出て上京し文士になってしばらく高知へ行ったことはなく三十何年ぶりに里帰りをしたときに是非揮毫してくださいと頼まれたときに、次から次に頼まれてうんざりして、ある時からこればかり書くようになったのが「牛も鳴き 狐も鳴きて 別れ哉」である人が勇気を出して先生にどういう意味か聞いたところ「もう来ん」と、牛がもうと鳴いて狐がコンと鳴く、あまりに毎日毎日飲待されもう来たくない、もうこん、もうこんと非常にひょうきんなところもある人で、こんな俳句というか川柳というか残しています。

桂月が生きた時代は明治2年に生まれて大正14年に亡くなっています。ちょうど名ただたる明治の文豪が輩出した同時代の人で、文章家としてならしたわけですが文学史にはほとんどない、我々中学とか高校で文学史が出てきますが、夏目漱石とか正岡子規、坪内逍遙とか尾崎紅葉とか樋口一葉、芥川龍之



介まで、明治・大正のいわゆる文豪と呼ばれる有名人は、我々も名前だけは知っていますがその文学史に大町桂月は出てこないです。でも夏目漱石と全く同じくらいの年齢で同じ年代を生きただけです。文業というのはたくさんありまして、この人は一高、東大卒のエリートで最初から文士になりたいとは思わなかったようで最初は軍人を目指した、でもならなかった。なぜかというところと近眼が非常に強かったことらしいです。次に政治家を目指しましたがなれなかった、なぜかというところとともりだったから。政治家というのは演説をしなければならぬのでスムーズに言葉が出ないと商売になりませんから、それで軍人も政治家もあきらめて文士になったという話です。一高、東大出のエリートで、明治の初めに大学は数えるくらいしかなく、しかも東大ですから超エリートなわけですが、今で言う文学部の国文科卒で、国文科というのは7人しかいなかった、7人いて成績は最下位ではなかったそうで後ろから2番目、要するに6番目の成績で卒業したそうです。

結局彼の文業とは何かといいますと、小説では失敗しました、小説も何編かは書いたらしいですけども小説では成功しなかった、最初に彼の名を有名にした作品は「美文韻文花紅葉集」というのを二十代の頃に出しました、言われても何のことかさっぱりわかりませんよね、というのは「美文韻文」というジャンルが明治時代にはあった



のです。流麗な文体で随筆とか短編小説とかを書く形式があったのです。明治の中頃にはすたれて、文学作品のジャンルとしては消えてしまったのです。非常に流麗な文体で素晴らしい文章を書く人で、この作品が皆さんに読まれ90版を重ねて大成功したのですが、結局はこの「美文韻文」というジャンルが消滅したことであまり歴史の中に残らなくなったという不運な面はあります。そのほかいろんなジャンルに手を出して非常にたくさんの物を書いております。歌も詠むし詩も詠むし評論も書く。修養書、史伝、文書作法、随筆、紀行文と200冊以上の本を出して1,000編以上の著作があつて生前に12巻の全集を刊行しています。ここに全集の一部が置いてあります。生前12巻の全集が刊行されるということは、それだけ読む人があったということです。沢山の読者を抱えていて非常に人気作家だったということです。中でも彼が得意としたのは学生向けの色々な教訓物、評論、修養書、そういうものの中で彼が大活躍したのは学生向けの雑誌「学生」という雑誌ですけれどもこれの主筆として8年1ヵ月間文筆活動の中心を其処に置いて活躍したということです。当時10万部近く売れたそうです。学生に超人気の作家だった、これがその一つ『人の運』という作品です。明治・大正の青年で桂月の作品に親しまざるはなしと当時絶賛されていました。なんと、芥川龍之介も桂月のファンで桂月全集の第8巻に序文を書いています。ですから、いかに当時若者にもてはやされた有名作家であったかということです。結局彼の活躍した主なジャンルは何かというと随筆家、評論家という立

場です。これが彼が一番活躍した立場で小説家ではないです。思想家でもないわけですから、文豪と呼ばれる中には残念ながら入らなかったということです。

桂月の光の部分です、先ほど話したように筆の上の教育者、これが彼の第一の歴史に残る舞台であったということです。教育という面では実際教鞭をとったことがあるそうです。30歳から31歳の時に出雲で中学教師になり1年とちょっと勤めました。これは望んで勤めたわけではなく借金を返すために勤めたということです。どうしても文筆家というのは収入が不安定ですから、借金を負ってしまい返さなくてはならなくなったので定職を何か得なければならぬ。ということである人の紹介で、借金を返すために本人としてはやむなく、しかも当時は中央文壇で大活躍していましたから出雲あたりに行くことは下野したというか中央文壇から離れたと世間ではみなされるわけです。なんでこういうことになったかという、実は借金をした人の保証人になった、自分が借金をしたわけではなく、借金した人の保証人として肩代わりして返さなければならなくなった。定職を得て教鞭をとったのには実はそういう背景があったということのようです。「学生」の主筆になる前に博文館というところに入社していて、他の雑誌の評論とか、若者の心得とかそういうものを書く指導を若いころからしていたということです。雑誌「学生」の主筆という職を得て8年余りに没頭したということです。これはすごいことで8年1ヵ月105冊の雑誌の数になりますが8年間1回も休まなかった。病気の時もあったのですが、病気の時は口述筆記させて1回も文章の載らない月はなかった、それぐらい非常に勤勉な面がある人です。当時の若者にとって大町桂月の書いたものがどういう位置づけがなされていたかという、青少年にとって桂月は人生の指針の適切なアドバイザーであり信頼のおける厳父にして慈父のような存在、苦学履行している青少年に暖かい眼差しを向け、しきりと励まし、戒め、勇気づけ、発奮させる文章を書いたということです。桂月の文章を読んだ若者が長じて日本全国各地において桂月の人生訓を礎に社会生活を切り開いていったことが推察される。いろんな広い分野にわたって道徳、宗教、国家、家族、死生観、いろんな問題をすべて扱って論じたというふうなことで、当時の青少年のカリスマみたいな存在だったということです。これは編集後記ですが「学生第1号は読者諸君の熱心な賛助によって売り切れまた売り切れ、増刷に増刷を重ねてここに4版を発行するに至った、それでもまだ不足で・・・」どこかに9万部と書いてありましたが非常にこの雑誌は売れに売れた雑誌である言うことが編集後記からうかがえるということです。この雑誌の中に石川啄木の短歌が載っています。石川啄木は当時もう有名でしたから「学生」という雑誌は学生にとっては第一の学生雑誌というふうに言えると思います。

二つ目の桂月の光の当たる部分として「探勝者紀行文作家」という部分があります。非常に旅行好きで旅行して歩いた各地の景勝地の特徴とか体験談を紀行文として次から次へと書いていた、当時全国に

鉄道が張り巡らされて旅行ブームと言ったらいいか、ある程度お金のある人の話ですが、旅行案内のようなものを当時の中産階級と言ったらいいのか、ある程度の人たちが求めていたので紀行文を書くことが結構売れました。紀行文作家の第一人者と言ってもいいぐらいの人だった、桂月の旅行、紀行というのは非常に徹底したものでした。体力には自信があり鉄脚と呼ばれるくらい足には自信があったので夜中まで歩いても平気で、桂月の旅行というのはスポーツ性に富んでいて、徒歩中心、夜歩くのも厭わない、野宿も厭わない、登山も厭わない徹底主義で見尽くす、登山のルートが3つあると3つ全部踏破するとか、あるいは見落としがあれば一回麓まで戻って麓からもう一回登ってくるとか、そういう徹底したことをやり、また自由気ままでお金には全然頓着しないで金がなければその辺で、極端な話土方でもしてお金を稼ぐとか、ちょっと揮毫するとか2、3日宿に泊まってちょっとした随筆を書いて出版社に渡してお金を稼ぐとか、あまり計画性のない自由気ままな旅であったというふうに言われています。彼は紀行文作家の第一人者として当時活躍していました。そういう人が明治41年十和田に足を踏み入れたわけです。ですから私たちが疑問に思うのは何で桂月が来てちょっと紹介しただけでこんなに騒がれるかということ、実は中央文壇で紀行文作家としても第一人者として名前がもうみんなに知れ渡っていたという、超有名紀行文作家だったということです、ですから桂月が紀行文を発表するということは日本全国に大きな宣伝効果を発揮するということです。当時こういう格好で登っているわけです。彼は非常に慎重で土地の案内人を雇っています。無鉄砲な側面、慎重な所もあって、山登りというのは一歩間違えば滑落しますから必ず土地の案内人を雇っています。当時紀行文作家として超有名だった人が十和田奥入瀬に来て紀行文を発表した。それが雑誌「太陽」に載り、この雑誌「太陽」は当時第一級の文芸誌・評論誌で日本一と言ってもいいような文芸誌・評論誌に載せたということです。ですから、全国に十和田奥入瀬の景勝を宣伝するのに大きな宣伝効果があったということになるんです。桂月がどういうふうに雑誌「太陽」に書いたかということと当時の文体は漢文調でちょっと読みづらいですけど紹介します。「ここに十和田の勝景の概要をあげむに、『山湖』として、最も偉大なること、一也。奥入瀬の溪流の幽静、天下無比なること、二也。湖の四周の山かばかり樹のしげりたるは、他に比なきこと三也。紅葉の美、四也。中海の断崖高く、水ふかきこと、他に比なし。五也。諸島みな岩にして、松を帯びたること六也。奥入瀬の本流支流に、高きは松見の瀧、廣きは根の口瀧を始めとし、見るべき瀑の多きこと、瀑布多しと称せらるる日光、塩原などの比にあらず、七也。その他、自籠神社の危巖、御倉山の千丈幕、御門石、豊石、碁盤石、雅俗とりどりに趣味あり。げに、十和田湖は、風光の美を一つに集めたる、天下有数の景勝地也」と賛美してやまないというか恥ずかしくなるほど誉めそやしている文章を雑誌「太陽」に出したということです。ですから大町桂月が十和田を全国に紹介した恩人であるというのは歴史的確かな事実であります。単に紹

介するだけでなく自然保護の思想をもっていたということで、これは別な景勝地を見てそれがけがされていることを嘆いて、自然というのは保護しなければならないということが大正6年にもう言っています。「勝地には、一切文明の利器は応用したくないものである」「勝地には、煙突を立てたくないと思う」「勝地には、広告を厳禁しなければならぬ」「勝地の樹木はいかなる理由がありとも伐採してはならぬと思う」これを大正6年に何かの雑誌に書いておられます。ですから非常に自然保護の高い思想を持っていたということが言えると思います。今奥入瀬でマイカー規制とか何日かやっていますけれども、すでに大正6年にこういうふうなことを言っており、社会思想家という面でも彼は高い立場でものを見ていたということです。

人物像ですが人間としても非常に尊敬できる人物像を持っていたということで、普段の生活は質素な生活で弊衣破帽と言いますけれども清貧、生涯借家住まいで家を買ったことがない、借金の肩代わりをしたり、桂月はベストセラー作家でありながら貧乏だった。なぜかという出版に原稿買取をしてもらう、ですから売れても売なくても原稿をポンと預けてなんぼと現金をもらってしまうので沢山売れたからと言って本人の収入になるわけじゃなくて、そういうやり方をしたので次から次へと原稿を書かないと本人の生活が支えられない、常に自転車操業みたいなことをやっていました。そのほかに義侠心とか反抗心とかいろいろあります。いろんな誉め言葉がありますが中でも特筆すべきは夏目漱石が「会ってみると感心したよ、桂月は善人なんだ」というのは夏目漱石はあまり桂月の文章を評価してなくて、調子はいいんだけど思想的に浅いというかそういうふうなことで、あるいは駄文というか生活のために沢山書きすぎているので、あまり中身を吟味せず次から次へと書いていたので文章自体は感心しないんだけどもと、それが会ったんですね、なんで会ったかということと社会運動家の松本道別（ちわき）と知り合いで、その人が東京都の電車賃の値上げに反対する運動で逮捕されまして家族が生活に困っているのを助けなければならないと、当時の文壇の主だった人たちに声をかけてチャリティー講演会をやろうと夏目漱石にも桂月が声をかけて、何とかお願いしたいというのを漱石がOKしてその時にいろいろと話をしたらしいのですが、その時に実際に会ってみると桂月は珍しい善人なんだよと、桂月の人格面については非常にほめていて、文章はほめてないのですが、そういうことがあって、人格面の人々の評価というのは非常にいいことばかりで素晴らしい人徳者と言える人だったということです。晩年鳶温泉で生活しても接する人、接する人が皆人柄をほめています。長女が語っているのは「父は寝間着も普段着もよそ行きも一つでしかも木綿だった・・・父は仙人のような人、良寛様のような人であった。買い物をするときはさびれた店に入った。デパートには一度も足を踏み入れなかった」そういうふうな素晴らしい人徳者であったということは誰しも認めるところです。

今度は影の部分に行きます、彼は国粋主義者であった、国粋主義者でもいいんですけども当時、明治

時代というのは、忠君愛国、富国強兵、殖産興業とこれから新しい日本を作るんだということで国を愛さなければ始まらないという思いはだれでもあるわけですが、ある事件を起こしたということでこの人の評価がガクンと下がったということです。それは与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」を徹底批判したからなんですけれども、その前に彼が国粹主義的な考えを持つに至った経緯というものをちょっと考えてみます。士族出身で国文科の卒業です。彼は11歳の時から故郷を離れて小学校の時から東京で暮らしています。最初は母方の叔父の多賀宗義という人の家に厄介になるわけですが、彼は軍人なわけで軍人ですから当然国粹主義的な考えをもって武士道精神を叩き込まれたとか、やせ我慢を叩き込まれたとか回顧していますけれども、少年時代軍人の家に育ったということです。それから青年時代になって杉浦重剛という人、有名な国粹主義者ですが、この塾に一年間寄宿しました。彼は貧乏でしたから住むところを探すのが大変だったので、そこで重剛の国粹主義を徹底的に学びました。重剛というのは大変な人で昭和天皇に倫理を進行して7年間にわたって270回、昭和天皇に帝王学を教えた人です。明治の非常に立派な教育者でした。晩年、杉浦重剛先生という伝記を薦温泉で桂月は書いています。そういうふうなことで国粹主義になる傾向をだんだんと生活の中から作り上げてきたんですね。桂月という人は、でも、それほど凝り固まった国粹主義ではなく比較的自由に開明的国粹主義という言い方をされますけれどもそんなに凝り固まった人ではなかった、ただ、これが問題だった「君死にたまふことなかれ」の詩を徹底批判しました。なぜかわかりませんが、最後の決定的な一言が彼の人生を狂わせたという文壇での地位を墜落させたみたいになります。「もし我、皇室中心主義の目をもって晶子の詩を検すれば乱心なり、賊子なり、国家の刑罰を加ふべき罪人なりと絶叫せざるを得ざるものなり」と徹底的に罵詈雑言を浴びせかけてしまいました。このことで文壇の彼の地位がおかしなものになってきました。人生を狂わせたということです。

もう一つ影の部分です、先ほどちょっと出ましたが酒飲み、酒飲みでもそんなに酒浸りの生活ではなく、だんだんだんだんとおかしくなっていたと。そもそも酒が始まったのは彼が少年時代寄宿した多賀宗義という人が酒飲みで、将校ですから部下が遊びに来てしょっちゅう酒を飲んだりするわけですよ、その中に入って一緒に飲んだりして、酒をおじさんから習った。それからどもりであった、どもりを軽くするために酒を飲むと口が滑らかになるからと、実利的な面もあって酒に親しんでいたということです。博文館という当時一番大きい出版社に乞われて31歳から6年くらいいました。37歳で退社していますから、これは酒による勤務の乱れも一因だと言われています。勤めですから、出勤、出社の時間を守ってもらわなければ困りますが、どうもこの出勤、出社に対してルーズであったとか、出勤しても寝込んでいたとか、酔っぱらって寝ていたということがあったらしく、これ以上はということでお引き取り願いたいということでやめたと、酒による問題がだんだ

んと出て来ておりました。子供たちに対しても晩酌をしながらいろいろと説教したり、あれを教える、これを教えると言いながら酒の相手をさせていたみたいなどころもあって、親とすればちょっと問題のあった人、しかし子供たちは立派に育って長男は昆虫学者になっているという話です。ただ家族思いで子供たちは結構かわいがったということです。だんだんと月日が経つにつれて問題行動が出てきて、近所の板塀に墨でいろんな悪口を書いたり、抗議文を書いた紙を石でくるんで投げてガラスを割ったりと、ちょくちょくそういう問題が出てきました。決定的なのはアルコール中毒で強制入院1ヵ月、これのきっかけが先ほどお話ししましたが有名になって土佐に38年ぶりに里帰りして、この時連日連夜の接待で完全にアル中になり酒浸りの生活を40日続けて、どうにもこうにもしょうがなくなって強制入院ということです。退院してまた、一応文筆活動をするんですが、あまり自覚がない、アルコール中毒者というのは自覚がないんですね、「余、断酒すること一年半にして、節酒に移りぬ、一酔陶然たる時、詩思動き、奇想天外より落つ。酒ありてこそ桂月なれ。桂月より酒を奪い去らば、桂月は枯木寒巖のみ」と自己弁護しています。そのあといろいろ薦温泉で炬燵で大やけどするとか、だんだんと酒の害が目立ってきたということです。大正14年に胃潰瘍で大量吐血で亡くなっています。「極楽へ越ゆる峠のひとやすみ 薦の出湯に身をば清めて」なかなかこの辞世の歌はいいですね。

最後にまとめてみますと、土佐出身で一高、東大出のエリート。ジャーナリズムの世界で活躍した随筆家、評論家。先ほど言い忘れましたが「日本男子論」日本の男はどうあるべきかというのを論じたものですが、これをまともに論じた人というのは日本にはあまりいません、これは青年に対する修養書を書く中で「日本男子論」というのを盛んに展開していますが、「日本男子論」（やまとおのころん）という評論文もあります。随筆家、評論家であるということです。それから筆の上の教育者として若者を鼓舞激励したということです。一方国粹主義者で与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」を批判して敗れて文壇からは遠ざけられるようになった。後半生は探勝家、紀行文作家、揮毫家としても活動した。生活費を稼がなければなりませんので揮毫家としてある程度有名になって1枚、今で言う5,000円とか取るわけです。揮毫会を開いて、そんなことで生活費を稼いでいました。青森県にとっては十和田の景勝を広めた功労者、清貧で仙人さながらの人物像は多くの人々を引き付けた。アルコール依存症のために入院し奇行も出た。薦温泉をこよなく愛し、長期滞在を繰り返し本籍もこの地に移し、墓も薦にあります。

この人はやっぱり普通の人ではない、とても普通の尺度では測れない人である。君子のごとく逸士のごとく高僧のごとく大通人のごとく奇人のごとく変人のごとく少年のごとく小児のごとく生きたという、とても普通の尺度では測り切れない素晴らしい、なんとも魅力のある人物が大町桂月であるということで、皆さんの心に留めていただければありがたいとおもいます。